

幼児期前半における表象機能の発達

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター

2 歳児，3 歳児の発達に対する一般的なイメージとはどのようなものであろうか？ 発達における質的転換期との関連で捉えた場合、1 歳半と 4 歳あたりに「発達の節」があると考えられていることから、2，3 歳児はその間にあたる移行の時期として理解されているといえる。この移行期としての 2，3 歳児は、ふり遊びの場面では「虚構場面」の創造が見られはじめ、言語課題では現実を述べるために言葉が用いられる（「現実に引っ張られる」）ようになるという二つの発達の特徴が先行研究から示されてきた。しかし、2，3 歳児がもつ個々の発達の姿を総体として捉えよとする研究は十分に組み込まれてこなかった。

そこで、本研究は田中（1987）の「可逆操作の高次化における階層?段階理論」を基礎にし、次のような目的に取り組んだ。身振りは、「1 次元可逆操作期（1 歳半前後）」に獲得される「1 次元可逆操作」により個々の対象の意味が確定されるようになると、着実な理解がなされるようになると推察される。よって、「1 次元可逆操作期」において身振りが一定の水準で理解されることを検証する。「2 次元形成期（2 歳後半から 3 歳前半）」になると、「1 次元可逆操作」を系列的に用いて一度命名したものの「否定」あるいは「変更」が可能になると考えられる。そのことによって、代用のふり遊び（ある物を別の物として扱う）が理解されようになると思われるので、このことを検証する。「2 次元形成期」では、自分自身の置かれている状況とは異なった定型句を復唱するよう求められた場合、先行研究と同様、現実に即して答える傾向が示されると予想される。よって、このことを検証する。これら 3 つの点を検証するために、2 歳 6 ヶ月から 4 歳 7 ヶ月までの幼児 79 名を対象に実験課題を実施した。

実験課題は、課題（身振りの課題）、課題（代用のふり遊びの課題）、課題（言語課題）と新版 K 式発達検査の 4 つで構成した。課題は BPO（Body Part as Object）課題と IO（Imaginary Object）課題から構成され、それによって身振りの理解を確かめようと試みた。課題は OS（Object Substitution）課題によって代用のふり遊びの理解を確かめようと試みた。課題は、言語課題によって自身の置かれた状況とは異なる定型句を復唱するよう被験児に求めた場合、自らの知識や経験に基づいて答える傾向があるかどうかを確かめようと試みた。結果を分析するにあたっては、田中の「可逆操作の高次化における階層 段階」理論に基づいて、各被験児を「1 次元可逆操作期（1 歳半から 2 歳前半）」、「2 次元形成期（2 歳後半から 3 歳前半）」、「2 次元可逆操作期（3 歳後半から 4 歳前半）」の 3 つの発達段階に評定し、各発達段階における特徴を捉えるよう努めた。

結果からは次のことが示唆された。身振りの理解は予測していたように、「1 次元可逆操作期」において一定の水準で理解されていることが示された。そしてそれは、「1 次元可逆操作」による意味の確定がなされた結果と思われた。代用のふり遊びは、「2 次元形成期」になると理解されるようになるようであった。それは、命名したものの「否定」ある

いは「変更」をこの時期の被験児が行うことができるようになるからだと思われた。言語課題では、現実とは異なる意味をもつ定型句を復唱するように求められた場合、「2次元形成期」では自身の知識や経験に基づいて答える傾向が示された。そして、そういった傾向は「2次元可逆操作期」になるとほぼ見られなくなった。これは、「2次元形成期」では現実に即して答える傾向を示すとした先行研究の結果と一致するものであった。各発達段階における課題（代用のふり遊びの理解）と課題（言語課題）との関連を検討した。その結果「2次元形成期」においては、課題（言語課題）を通過できなかったが課題（代用のふり遊びの理解）では通過するという傾向が特徴として示された。これらのことから「2次元形成期」とは、現実と虚構の区別が確立される以前の状態であるため、その二つの間で揺れ動く特徴をもった時期であることが示された。

総合的な考察においては、保育や療育への応用の可能性について検討を行った。その際、「想像力の障害」があるとされる自閉症児に対する療育実践への応用の試案を提示した。その試案では、発達段階ごとの療育課題を「三つ組」障害と関連付けようとして提案を試みた。その際に、「こだわり」とも捉えられる興味や関心の偏りに焦点をあてる療育の可能性を提起した。

本研究はパイロットスタディーとしての性格をもっているため、使用した実験課題の発達の意味を明確にしていく必要性を残された課題として挙げた。加えて、他の発達段階とは異なる課題通過傾向を示した「2次元形成期」について、詳細に検討することがもう一つの課題とし挙げた。そして、幼児期を通じたふり遊びの発展過程、ふりと言語の関連性の解明、が表象機能に関する今後の研究の発展には必要であることを示した。